

ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



小樽色円及び運河地区再開発ケーススタディー

アルパック ニュースレター もくじ

NO.16

- 「その他のサービス業」からひとこと 2
- “京都美観風致賞”の顛末 4
- ARPA・K—アルパック—地域計画・建築研究所 5
- 新刊紹介 「市街地再開発事業のすすめ方」 5
- 住民の望む公園や緑地 6
- ミニ独立国バンザイ！ 8
- 勝手応援団募集 9
- まちかど ◦ アーケードかモールか 10

「その他のサービス業」からひとこと

糸 乗 貞 喜

その他バンザイ

「わかった」とか「わからぬ」などという言葉の漢字に解という字をあてたり分という字をあてたりしていることがある。正しくは「分かる」であるが、なぜ分けるという字を使うのか不思議に思ったことがある。考えてみると「わかる」ことは分解したり、分類したり、仕分けしたりすることと密接につながっている。

そういうことを感じていたら、面白い本があった。それは「“分ける”こと“分かる”こと」という本（坂本堅三著、講談社現代新書）である。この本を読みながら感じた、われわれの職業観などを、本の解題をかねて書いてみる。

「その他バンザイ」という気分を感じたのが、この本の読んだ一番の効用だったように思う。もう数年も前に読んだ本で、細部は記憶していないが、何か気にかかり続けている本でもあったので、ここに書いてみたくなった。

この本の内容については、題によって十分表わされているので、紹介の必要はないと思う。とにかく親切な本で、「とくにお急ぎの方は、おしまいの五章を読んでください」と書いてある。そして3項目の教訓として整理されているので、一応紹介しておく。「教訓その1 分類は認識や行動のために人間がつくった枠組であって、存在そのものの区別ではない。教訓その2 分類をつくる際には必ず、『その他』や『雑』の項目をおいておくことが有用である。教訓その3『わかる』と

はその分類体系がわかるということであり、『わかり合う』とは、相互に相手の分類の仕方がわかり合うことである」

新しいアイデアはその他から

つまりこの本は、「わかる」ために「分ける」ことがどれだけ有効かということ。「ことを分けて」古今の蘊蓄を傾けて書かれているので、一読をおすすめする次第だが、少し私の感想を述べさせていただく。「新しいアイデアや芽は、たいてい『その他』や『雑の部』に含まれている」ということが本書の中にもあるが、私どものような商売をしていると、まずはじめは資料整理（＝分類）から仕事を始め、いろいろな事象の変化をたどることになるが、まず気づくのは「その他」の増加である。商業統計を見ると「その他の小売業」の部分が大中に増えている。家計調査年報を見ても、「雑費」が年々ふえている。工業統計も分類に困ってついに変更をした——などとなっている。

他に分類できないその他のサービス業

考えてみると、人間の職業の歴史も同じような気がする。何万年前か何十万年前かは知らないが、全員が狩猟採集業だったり、農業だったりしたのだろうが、ある日突然第3次産業就業者が発生する。この人は「世話係」とか「管理職」とか「王様」とか「酋長」とか呼ばれた。またある日には農器具づくりを専門にする人も現れた（第2次産業の発生）。当時はまだ分類方法も進んでいなかったの

で、農業など以外はすべて「その他」と分類されたにちがいない。そしてこの新職業の人たちの世話をする人は、さしずめ「その他のその他」ぐらいに分類されただろうと思う。

かくして職業はドンドン増えていき、ついには日によって時間によって相手によって呼ばれ方がちがう職業まで発生した。「シンクタンク」とか「ギョウシャ」とか「コンサル」とか呼ばれるもので、分類に困った末「他に分類されないその他のサービス業」などというところに押し込められる。まさに「その他のその他の世話係」みたいな感じがする。

われわれの仕事というのは、誠に説明しにくい。中学、高校などの同窓会があると実に困る。「市役所に勤めている」とか「銀行員」とか言えればいいが、「他に分類されないその他のサービス業」などといっても「わかる」わけがない。

結婚式で職業説明

こういう状況からまた新しい需要も発生する。わが事務所の所員が結婚するとき「ちょっと祝辞をお願いしたいんですが」「その時、会社の宣伝と仕事の説明を入れてほしいんですが」というようなことになる。つまりこの時は「その他のその他の説明業」という職業が発生したことになる。

この説明が至難の技で、息子が親に説明できないようなことを2～3分で親戚中に説明せよといっても、どだい無理というものと思う。かくして、「20年前この事務所をはじめた頃は、まさかこんなに増えるとは思っていませんでした。会社が発展するかどうかは新郎の〇〇君などの若い人たちが決めていくことですが、この仕事が発展することはまちがいありませんから、この職業に就職したという点では絶対にまちがいないと思いますから、

御安心下さい」などと居直り発言で逃げることになる。

「分ける」と「まとめる」

蛇足ばかり長くなったが、もう一つおゆるしいただきたい。「まとめる能力が理解のために必要だ」ということを、なだいなだ（作家・精神科医）という人が書いている（日経新聞 60. 10. 14）。王様と歴史家がいる、ある国の歴史をまとめると命じられた歴史家が、数冊にまとめた。長すぎて読めないといわれ、1冊に、その半分に、ついで1ページにしたがまだ長すぎる。ついに「〇〇国は〇〇年に起り、〇〇年に滅んだ」と1行にまとめたら「よく分った」といわれたという話が引用されている。そして医者も患者さんを診るとき、まとめるという態度が必要だといいながら、次のように書かれている。「医者をしていると、この病人は急いでいるのだから、短時間で診察を終え、大きな病気はない、と安心させるだけでいい、というような判断が必要な場合もあるが、それをやるのも一種のまとめである」という態度は見事な診察態度である。しかしよく考えてみると、このまとめ方はまた見事な仕分けでもある。

実に奇妙なことだが、結局のところ「分ける」はまとめるの一種であり、「まとめる」は「分ける」の一種であるように思う。

（いとりのりさだよし）

“京都美観風致賞”の顛末

山田 順 三

あれは確か、昭和56年の秋、11月頃だったと思う。京都建築設計監理協会の副会長であった三輪先生から、同協会の研修会で京都の風致について話をしてほしいという要請があった。風致景観行政を推進していくためには、なんととっても市民の協力と理解が大前提である。私は一も二もなく快諾した。

その時、一時間ばかりの講演の締めくくりとして「京都の風致景観にとって、範となるような建物について、市長が表彰するような制度を、近い将来、確立しようと思っています」と、ブツてしまった。たまたま、私の心の中に温めていたアイデアではあったが、発言した以上、引込める訳にはいかない。

自分では画期的なプロジェクトだと位置付けていたのだが、何か新しい事業を始めるとなると、役所ではその手順が大変であった。

先ず他都市の実情を調査した。その上で、翌年の夏、美観風致専門小委員会に提案、説明したところ、諸先生から賛同と励ましの言葉をいただいた。原案の作成、関係諸団体への呼びかけをはじめ、審査委員のリストアップなど、めまぐるしく時間が過ぎていった。構想から二年の歳月が流れていた。そして、とうとう昭和58年に第1回目にこぎつけた。試行錯誤の連続であったが、マスコミからも取材を受け、それなりに成功をおさめた。一昨年は第2回を経験し、いよいよ京都美観風致賞も定着することになった。

そして、昨年は第3回目を迎えた。84点の応募中、第1次審査で10点が選ばれた。その10点については、慎重な現地審査が行われた。

私も事務局として随行し、出来るだけ審査員に密着して、設計者になりかわって設計趣旨を説明した。その中には、アルパックの設計による橘女子高校も残っていた。桃山御陵の緑をバックに、風致地区にマッチしたキャンパス計画と、洗練されたデザインによる建築計画は、21世紀へ翔たく乙女達に優雅な希望と夢を抱かせるようであった。

また、橘女子学園といえば、アルパックから相談を受け、ちょうど私達風致係のスタッフとディスカッションしているところをKBSテレビに取材され、「市民しんぶん」でオンエアされたことがあったり、また、私の妻の出身校であったりし、因縁浅からぬものがあった。

そして、橘女子高校が、第2次審査に残り入選した時にはとても嬉しかった。私の指導も良かったことになるからだ。

この賞が、これからもユニークな賞として、また、益々権威あるものとして位置付けられることを祈念しています。

(やまだじゅんぞう 京都市計画局風致課)

*このような原稿を山田様からいただきました。少々こそばゆい点もあったのですが、載せさせていただきました。どうもありがとうございました。(い)

ARPA・K — アルパック
— 地域計画・建築研究所

三輪泰司

お気づきと思いますが、このニューズレターには、英字、カタカナ、漢字と3通りで自分の社名を書いています。封筒類にも

ARPA・K 地域計画・建築研究所と印刷しています。

CI計画の一環ですが、ここいらでARPA・Kの由来など解説を試みたいと思います。

吉田山山麓のさやかなアトリエARPA・K開設の日は1967年（昭和42年）2月3日の節分の日ですが、実際の活動スタートは、その前年、1966年9月17日です。かの有名な進々堂に創業メンバー3人に上田篤京大助教授（現阪大教授）の4人が集り、地域計画なる領域にチャレンジしようと決意した時です。この時、名称も決めました。当時は、「地域計画」という言葉も一般になじみがうすく、正式に社名に使ったのは初めてではなかったかと思います。

英文名（このニューズレターの最後のペー

ジにもあります）とその略 — ARPA・Kも決めました。直訳すると“建築家・地域計画家と仲間達”でプロフェッションの説明でもあります。そしておしりに京都とついています。

初めは、大阪につくればARPA・O、東京ならARPA・Tとするつもりでした。

しかし、皆さんにARPA・K—アルパックと呼んで頂くようになってきて、このKは、根をはっている関西のことと思って頂いてもよいなと思っています。とともに、創業の地京都が、この種のビジネスにとって大事な文化と情報の世界的拠点になって頂きたいという気持も込めています。

なじみがないと気にしていた「地域計画」もすっかり世の中に拡がり定着し、似たような名のシンクタンクやコンサルタントが現われました。ARPA・Kと英字名をつけていたのは正解だったし、アルパックとナウい呼び方で親しんで頂けるのはありがたいことだと思っております。

なお、題字の地色スカイブルーも創業時に決めたシンボルカラーです。

（みわひろし 代表取締役社長）

市街地再開発事業のすすめ方

日経REIA 全国市街地再開発協会



新刊紹介

「市街地再開発事業のすすめ方」

先取り 3分 に後取り 7分

「都市計画」とか「まちづくり」とかいう話になると、必ず“時代を先取りして……”といった景気のいい話が出てくる。ところが「再開発事業」の場合は、同じ都市計画事業であっても、先取りを景気よくぶち上げることはむずかしい。（6ページへ）

住民の望む公園や緑地

内村 雄二

都市のアメニティ空間（快適なところ）という、公園や緑地等を思い浮かべますが、住民からみたとき実際によく行く公園やいこの場として日常的に使っている公園はどんなところでしょうか。

住民がより好ましく思う公園、散歩やレクリエーション等に利用する公園等について、名古屋市でおこなったあるアンケート調査を通して分かったことを簡単にお知らせします。公園や緑地等の計画・設計にあたって、少しでも参考になれば幸いです。

よく利用される公園のタイプ

① 多機能型の公園

（5ページより）

再開発の場合は、商売し生活している土地と建物がそっくり変わってしまうのであるから、単に今より良くなりますよ……ではふみ切れない。後れをとってしまっている街の改造だとか、現在のお客さんの気持に合った商店街にするとかの、「立後れをとり返す」といった動機や、「このままいたら衰退してしまう」といった心配がないとなかなか進まない。つまり、先取りよりも後取りが第1の課題になる。

このあたりが区画整理と再開発の最もちがう点で、前者は「『換地』であるから土地のみを対象とし、『評価』と『減歩』と『補償』が中心の話になるが、再開発の場合は『建物内での位置（商業上の問題）』とか『生活・経

ひと口で言うと、色々な施設があり多様な利用が楽しめる公園です。たとえば、図書館や体育館が隣接したところにある公園とか、野球場・テニス場等のある公園です。

このような公園は、周辺住民の日常的利用と広域からの利用もされており、強い集客力を持っています。（写真1）

② 緑のポリュームのある公園

規模の大きい公園で、大木や多種類の花木があり、住民の日常的な散歩やいこの場となっています。また野鳥や昆虫等の自然の生物がたくさん見られます。（写真2）

③ 住宅団地に隣接する公園

人がたくさん居て隣に広場があれば、住民

『が権利者の関心のマト』になる。（本書34頁）

本書は再開発事業に対して、とっつきやすい手引書を意図して編集されており、地元の人がどんな心配をするか、あるいは問題となりやすい事項などについて、コラムを設けて具体的にふれられている。

コラムの見出しを捨ててみると、「自分ノ権利ガドウナルカワカラナイニ賛成モ反対モイエナイ」、「設計の押しつけはできない」、「事業が進むときのきっかけ」など、興味の起りやすい話がつづいている。このコラムだけ読んでいっただけで、けっこう再開発の流れがわかるように思う。ぜひ御一読を。（社全国市街地再開発協会刊 Tel 03-591-2361）

はそこを利用するといった感じの公園です。利用という点で、需要と供給のバランスがうまくとれているように思える公園です。(写真3)

④ 神社や寺の境内と一体となった公園

旧集落や古い住宅地には、新しい市街地に比べ多くの社寺が見られます。このようなところには、神社や寺に隣接した公園があります。規模的にはそんなに大きくはありませんが、空間的に神社と一体となった感じがし、相乗効果を生み出しており、独特の広がりを持つアメニティ空間を造っています。また神社等の祭りの際に公園のオープンスペースが有効になっています。(写真4)

今後の公園づくりに期待されること

住民に利用されている公園の実態をみて、これからの公園や緑地の整備にあたって、使う側からの公園に対するニーズは、ひと言でいうと“何か特色のある公園”だと考えられます。

先にあげた4つのタイプの公園は、いずれも何らかの特色を持っており、使う側にその利用価値を暗示しています。つまり、ここでどんなことができそうか、またおもしろく時間を過ごせるか等といった要求に応えられる公園が望まれているのです。

具体的に計画・設計するうえでのポリシーとして、以上のことに留意することで今後の公園はもっと住民に親しまれることでしょう。それにしても、アメニティ空間に対する人々の評価はきびしくなっているのではないか

(いいかえると目が肥えてきている)と感じました。これからは、よく使われる公園とそうでない公園とはますますはっきりしてくるかも知れません。

(うちむらゆうじ 名古屋事務所)



写真1 多機能型の公園

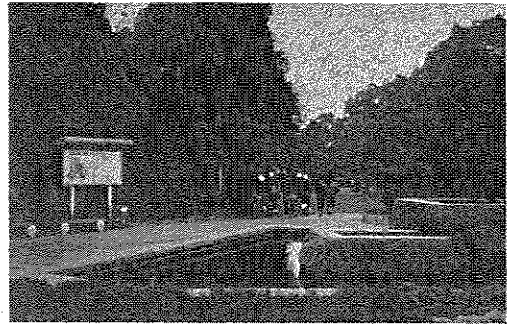


写真2 緑のボリュームのある公園



写真3 住宅団地に隣接する公園



写真4 神社の境内と一体となった公園

ミニ独立国バンザイ！

藤田 武彦

去る1月3日～8日まで、大阪は天王寺、アベノ近鉄百貨店で、日本のミニ独立国第1回万国博覧会（エキスポ'86）が開かれました。ミニ独立国のことを少し考えてみます。

ミニ独立国は自分たちの手で、ふるさとや文化を守っていくとして昭和50年代後半頃から各地にポツポツ始められ、現在では、約90カ国にまで広がっているとのこと。

その内容は、観光を中心としている国、自然保護を中心としている国などさまざまですが、自主独立、独自の文化の創造と地域おこしをめざしており、行政も加わって進めているものも多いようです。

エキスポ'86に参加した国は、北は北海のポテト共和国から南は鹿児島県のみやんじょチクリン国まで21カ国、近畿圏では、城崎のカニ王国、大阪のそやんか合衆国が参加されていました。各地のふるさと運動が出ていくというよりむしろ「遊び」をかなりまじめにやっている印象をうけました。

会場では、ミニ独立国の紹介、万国グルメ館（出雲ソバと、各地の雑煮）、参加国によるイベントがされていました。スペース的に制限があって、参加国のいきいきとした活動が伝わらなかったのは残念でしたが、いろいろ考えさせられました。

独立圏が日常の出来事になった

考えてみると、今からひと昔前に、こうした独立国とかやっていたら、それも行政が加わっていたらどうでしょう。

「何をばかなことを。他にやることあるだ

ろう」といろんな方面からいわれたにちがいません。今でもそうかもしれません。私もある町でふるさと運動を展開しようとして、同じように言われました。その意味で、「遊び」をまじめにやるのは大変だったろうなあと思わずにはいられませんでした。同時にこうした活動が、堂々と進めていける時代になったことを感慨深く思いました。みんなで軽く動いていける、おもしろい時代になったようです。

地域づくりと人のつながり

もう1つエキスポ'86を見て気づいたことは、少し前まで、地域づくりというのは、道路づくりかと思えるほど、地方の町村にいても道路（町道、農林道など）をつくっていましたが、地域の活性化はそれだけではなく、むしろ新しい人間のつながりをつくっていく中で考えることだ、という意見が一般的になったのだなあとということです。独立国の人たちも、こうしたイベントや、地元での話し合いを通じて新しい視野で、地域を見つめ直すことを進めていच्छると思います。

私たちの地方の町村での地域づくりの仕事でも、「計画づくりはいいから、みんなで動いていける何か1つでも進めていきたい」と熱心にいわれます。

その時いつも課題になるのが、地域の資源を見直すことと、人のつながりをつけることです。特に後者については、急につくられるものでもなく、これまであまり意識せずに計画づくりがされてきた経過があるようです。



あけましておめでとう！

こうした課題に対応するために、人のネットワークづくりをより進めてまいりたいと考えております。御協力のほどよろしくお願いいたします。

(追記)

私共の事務所でも、ふるさと運動に関わっております。この場をかりて、紹介並びに、お願いを申し上げます。

兵庫県の但馬地域に、人口3,000人の美方町という町があります。去年から「但馬ふるさと小代村」ということで、まちの活気づくりと、産品開発をめざしてふるさと運動をは

じめています。

去年は約300世帯の会員で進めましたが、今年新たに会員募集を行います。去年は年会費1万5千円で年3回のふるさとと産品送付、ふるさとまつりなどの交流をしました。

スキー、山菜料理、但馬牛、ほんものの特チモチなど名物もあります。本当に雪深い但馬の山村で、おちつけるところです。

新しい募集要項もありますので、アルパック大阪事務所に御一報下さい。資料、募集要項をお送りします。

(ふじたたけひこ 大阪事務所)

勝手応援団募集

尾関利勝

町並みや歴史的環境の紹介など独得な記事と編集で私達の手元に新鮮でホットな情報を提供してくれていた雑誌「環境文化」(発行環境文化研究所)がこの3月で休刊になると言う知らせが来ました。

ファンの数が少なかったのか、応援団の声援が小さかったのかともかく、歴史的環境の分野で唯一と言ってもよい定期刊行物が休刊になるのは何とも寂しいことと思いませんか。

一日も早い復刊を心ながら願う1人ですが、できれば勝手応援団になろうかなと思います。賛同される方は御一報を。

(おぜきとしかつ 名古屋事務所長)

まちかど

アーケードかモールか

馬場正哲

『アーケードかモールか』、よく商店街で議論されるところです。そこで、昨秋、ヨーロッパのモールを見て回り、モールの中でアーケード的なもののヒントを得ました。

写真1はシュツツガルト・ケーニッヒ通りのガラスの「傘」です。テラス風に使われているのですが、これを連続させるとアーケードの機能を果たすのでは……。

写真2はロッテルダム・ラインバーンでの「庇」です。モールの両サイドと、横断する庇で、仕上げは木、上部にはゼラニウムなど花で飾られています。

2つの例はモール化された「道路」を占用する建築物(?)のようで、日本では許可を受けるのに困難が予想されます。さて、ヨーロッパでもアーケードが流行りのようですが、建物の中や街区内の再開発で、民地内がほとんどです。日本では「道路」上で許可されており、対照的な感じがします。

ついでですが、ガラスのバス停があまりに美しく印象的でしたので写真3で紹介します。

(ばばまさあき 大阪事務所)

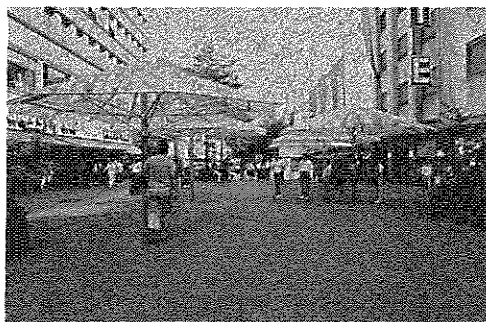


写真1 シュツツガルト・ケーニッヒ通り(西ドイツ)

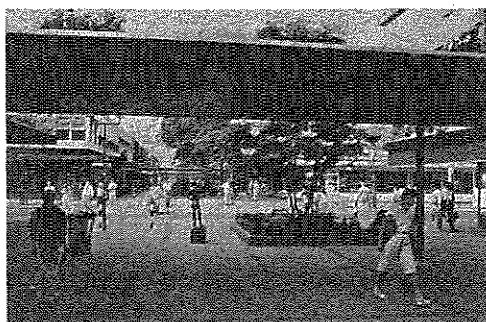


写真2 ロッテルダム・ラインバーン(オランダ)



写真3 クレフェルト駅前(西ドイツ)

ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

| | | | |
|--------------|------|-----------------------|----------------------|
| 本社 | 〒600 | 京都市下京区四條通り高倉西入ル立売西町82 | TEL (075)221-5132(代) |
| 京都事務所 | | (大和銀行京都ビル8階) | |
| 大阪事務所 | 〒540 | 大阪市東区石町1丁目1番地 | TEL (06)942-5732(代) |
| | | (天満橋千代田ビル2号館) | |
| 名古屋事務所 | 〒460 | 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 | TEL (052)962-1224 |
| | | (ツボウチビル6階) | |
| 九州地域計画研究所 | 〒810 | 福岡市博多区中洲中島町3-3 児島ビル3階 | TEL (092)281-2349 |
| 北海道地域計画建築研究所 | 〒047 | 小樽市色内1丁目2番19号 通信浜ビル3階 | TEL (0134)29-1109 |